

<第1号議案>

2023年度事業報告について

1. 概況

2023年度は、パンデミックが落ち着いて通常業務に戻ったものの、ウクライナやパレスチナにおける戦争や、物価高騰、経済格差など国内外で不安が後を絶たなかった。道内でも、史上最高の猛暑が記録され、一次産業は大きなダメージを被った。将来が予測できない今の時代に、市民自らが小さく自立し、つながり合って支える関係性と、限られた資源を分かち合う仕組みはこれまで以上に求められていると感じる。

そのような社会情勢を受けて、今年度は環境負荷の削減を一つの重点課題とした。近年、地域内で大規模風力発電事業が進んでいることを背景に、地域でエネルギー問題に対する知識を深め、自給モデルをつくることを目的に、勉強会を開催したり、ソーラーシェアリングの実証実験を行ったりした。

また、教育旅行などの教育研修に力を入れた結果、企業や海外の学生などターゲットが広がり、事業収入の拡大にもつながった。

新規事業の余市ピースワイン・プロジェクトについては、新たにワインブドウ畑を拡大し、多様な参加者を招いて植樹イベントを行うとともに、平和を祈るメッセージを発信した。一方、高温多湿が原因でブドウが病気になるという問題が発生し対策に悩まされた。これも、気候変動の恐怖を認識しつつ、エコビレッジのワインづくりにおいて最も大切なことや将来の在り方について考えるきっかけとなった。

2. 余市エコカレッジ/主催事業

毎月、環境やコミュニティなどのテーマごとにゲストスピーカーを招いて、連続のオンライン・セミナーを開催した。

- 1月 宇山生朗（北海道環境財団）
- 2月 谷口テトラ（京都芸術大学、アースディジャパン）
- 3月 坂井勇貴（サイハテ・エコビレッジ）
- 4月 小西史明（登醸造）
- 5月 寺林彰良（北星学園大学）
- 6月 谷口由布子（東京大学4年生）
- 7月 開澤真一郎（NPO法人NICE）
- 8月 櫻井百子（アトリエmomo）
- 10月 小山宮佳江（トランジションタウン藤野）

11月 小野寺愛（一社そっか）

12月 山形定（北海道大学）

今期は、対面イベントを再開し、親子植樹、エディブルガーデン・ワークショップ、パーマカルチャー講座、英語漬け体験、「リジェネラティブ農業」映画上映会などを実施した。

特に重点課題の環境問題については、「地域を豊かにする再生エネルギー」をテーマに、地域住民の参加を促しながら連続勉強会を開催した。（秋山記念生命科学財団助成）さらに、営農型太陽光発電やPPAなどの技術や仕組みを実証実験するために、敷地内に設備を建設した。設備は㈱Terraが敷地を賃借して建設し、㈱HALKULが10年の契約で生産した電気を買い取る形で進めている。

また、サクランボが枯死して空き地が増えている斜面に、実のなる木や花の咲く木等を積極的に植樹し、教育プログラムで活用するとともに、食べたり遊んだりできる森づくりを開始した。（コープ未来の森基金助成）

恒例のワークキャンプは春、夏に開催し、春はブドウ畑の開墾・整地、夏は英国カーディフ大学の学生らを迎えて薪割りやブドウの草刈り、地域農家の手伝いをした。海外からのボランティアが増え、彼らの主体的な活躍に多いに助けられた。

3. 余市エコカレッジ/体験・研修プログラム（受託事業）

団体の趣旨に共感する法人や個人をターゲットとし、エコビレッジの暮らしをベースにした体験講座の他、各グループごとの課題や要望に併せたプログラムを提供した。

ESDキャンパスアジア（北海道大学43人）、北海道大学農学部（14人）、北海学園大学（8人）、札幌学院大学（14人）、慶応大学山形ゼミ、（15人）早稲田大学大学院池上ゼミ（9人）、東京大学（7人）、慶尚大学（韓国21人）、テマセック大学（シンガポール24人）、サマーインスティテュート（21人）、札幌市福移中学校（13人）、帝塚山学院（8人）、五条市西吉野農業高校（12人）、聖徳学院中学（39人）、余市町職員研修（21人）、共立国際交流奨学財団（24人）、グローバルエコビレッジジャパン（GEN8人）、コープさっぽろ 親子植樹（18人）、スローフード北海道（6人）、シュタイナーズクールいずみの学校（11人）、インフィニティ国際学院（5人）、ネスレ・オルタナ研修（6人）、Tedx Sapporo（12人）、Go!Local!（札幌市10人）、宝島旅行社インバウンドツアー他（順不同）

学校の修学旅行や探求学習を対象にしたSDGs研修については、中学生から大学院生まで多様な層を受け入れて好評を得た。さらに、冬期間、あるいはガイドなしでも自立して実施できるオリエンテーリング型など、通年全天候型のプログラムを開発した。

その他、都内在住の留学生のホームスティプログラムや、札幌市の事業で都市部から農村の活性に寄与する人材育成のプログラム、企業の人材研修など多様なニーズに応えながら、研修受入

れの幅を拡大することができた。

4 教育ファーム

「自ら食べ物を作る」実践と、体験や学びの場を提供する教育農園を目指して運営した。

ワインぶどうの栽培と醸造は、これまでどおり登醸造やしきの畑の指導・協力を得ながら、スタッフや住み込みボランティアを中心に、ヴィンヤードクラブが協力して行った。安定した栽培管理がされたが、全体的に関わった人数は減少した。広く現場の様子を伝えたり、クラブ活動や公開イベントなどで、より多くの参加者を集める工夫が必要である。

夏の猛暑が原因で病気が発生したためブドウの収量は減ったものの、計 890 kg を収穫してスパークリングワインとジュースを仕込んだ。

「余市ピースワイン・プロジェクト」については、新たに未利用農地（約 10a）を開墾し、春のワークキャンプで整地した。5月の植樹イベントには、8か国からの外国人留学生やボランティアも参加し、ブドウ苗（324本）を植樹した。また、ユナイテッドピープルの代表関根さん、「国際平和の鐘を守る会」代表の高瀬聖子さんをゲストにお招きし、平和の鐘を鳴らして世界の平和を祈るセレモニーを行った。

自給用の畑は「畑クラブ」が中心となって栽培管理を行うとともに、土づくりを勉強したり、漬物を作ったりしながら、主体的な活動が行われた。また、町内の平飼養鶏農家から譲ってもらった廃鶏を育てた。毎日新鮮な卵をいただいたり、肉にしたりする作業は、住込みスタッフやボランティアの学びの体験として有意義だった。羊については、担当者不在を理由に断念した。

5 地域貢献活動

収穫繁忙期にボランティアを派遣したり、滞在のサポートをしたりして、農家の人材支援をした。また、HEPPで実施している研修等が関係人口の拡大に貢献していることから、町の地域おこし協力隊を受け入れ、町をPRするおためし体験ツアーを実施するなど町との関係性が深まった。

その他、近所の新生会館の管理運営を任せられたり、町の依頼で五条市の農業高校生を受け入れたりして、地域活性に寄与した。

6 運営体制

庶務・経理、教育・研修プログラム、ワインブドウの栽培については有償スタッフが（業務委託）、日々の農作業や施設管理などは短期中期のインターンスタッフや学生や外国人のボランティア（無償）が担った。ユナイテッドピープルや地域おこし協力隊など、関わり方が多様になった。

イベントの食事やホームページの管理については、会員その他外部委託することで質の高い成果をあげた。

7 広報事業

HP に特設サイトを設けて、イベント等の告知や申込みがスムーズにできるような仕組みを導入した。SNS については FB やインスタなどで時折発信したが、広報担当不在でこまめな管理ができなかった。

アンバサダーも広報不足で数は伸びなかったが、リピーターには好評で、収益性も高い。今年は余市という地域括りを外して、同じような目的や価値観を持つ他団体とつながろうと、メロビレッジ長沼の商品を返礼品に加えた。

8 会員制度の改正

組織運営に興味のある人、実践活動に特化したい人、経済的に支援したい人など、会員の関わり方を明確にするため、議決権を持たずに活動に関わる「アクティビティ会員」を増設した。

会員総数は若干減少したが、会費収入は微増した。積極的な関わりを求める人が増え、かつ煩雑だった総会開催にかかる事務が円滑になった。

総数97→90人（正会員26人、アクティビティ会員27人、サポート会員37人）